よみがえる「和歌山県 県勢歌」

昭和14年(1939)に発表され、県民に歌われていたという「和歌山県県勢歌」については、これまで明確な行政資料が残されておらず、はっきりとしたことが分からない状態であった。しかし、このほど横浜市在住の作曲者の子息から情報が寄せられ、それを契機として、和歌山県立博物館による当時発行された県内の新聞・雑誌の調査から、作詞者名・作曲者名のほか、歌詞および楽譜が判明し、制作の状況についても一定程度明らかになった。

これらの情報を総合すると、「和歌山県 県勢歌」は日中戦争開戦後の「国民精神総動員」政策の下で、郷土和歌山県の真の姿を讃え、愛郷精神作興に資するために創作された歌で、和歌山県統計課・統計協会が中心となって、昭和 13 年度の県統計をもとに、全国から歌詞を募集した。昭和 13 年(1938) 6 月末までに 176 編の応募があり、県総務部長・中島知道や和歌山高等商業学校長・花田大五郎（比露思）ら、県幹部や学校関係者などの 17 人の審査委員が審査し、優秀作品 3 編を選出したが決定に至らず、審査委員でもあった山名貫児・三溝信雄（いずれも和歌山県師範学校教諭）に、優秀作品 3 編をもとに作詩を依頼し、作曲は同じく県師範学校教諭の鈴木富三(1910～97)に依嘱した。曲は、昭和 14 年 1 月に完成し（『大阪朝日新聞』（和歌山版） 1 月 18 日付)、同年 5 月 10 日の統計記念日に、県総務部長から正式発表された。発表を報道した県内各紙のうち、『大阪毎日新聞』（和歌山版）5 月 11 日付には、歌詞（1～5 番）と作曲者自筆の楽譜写真が掲載されており、この曲の全貌について知ることができる。

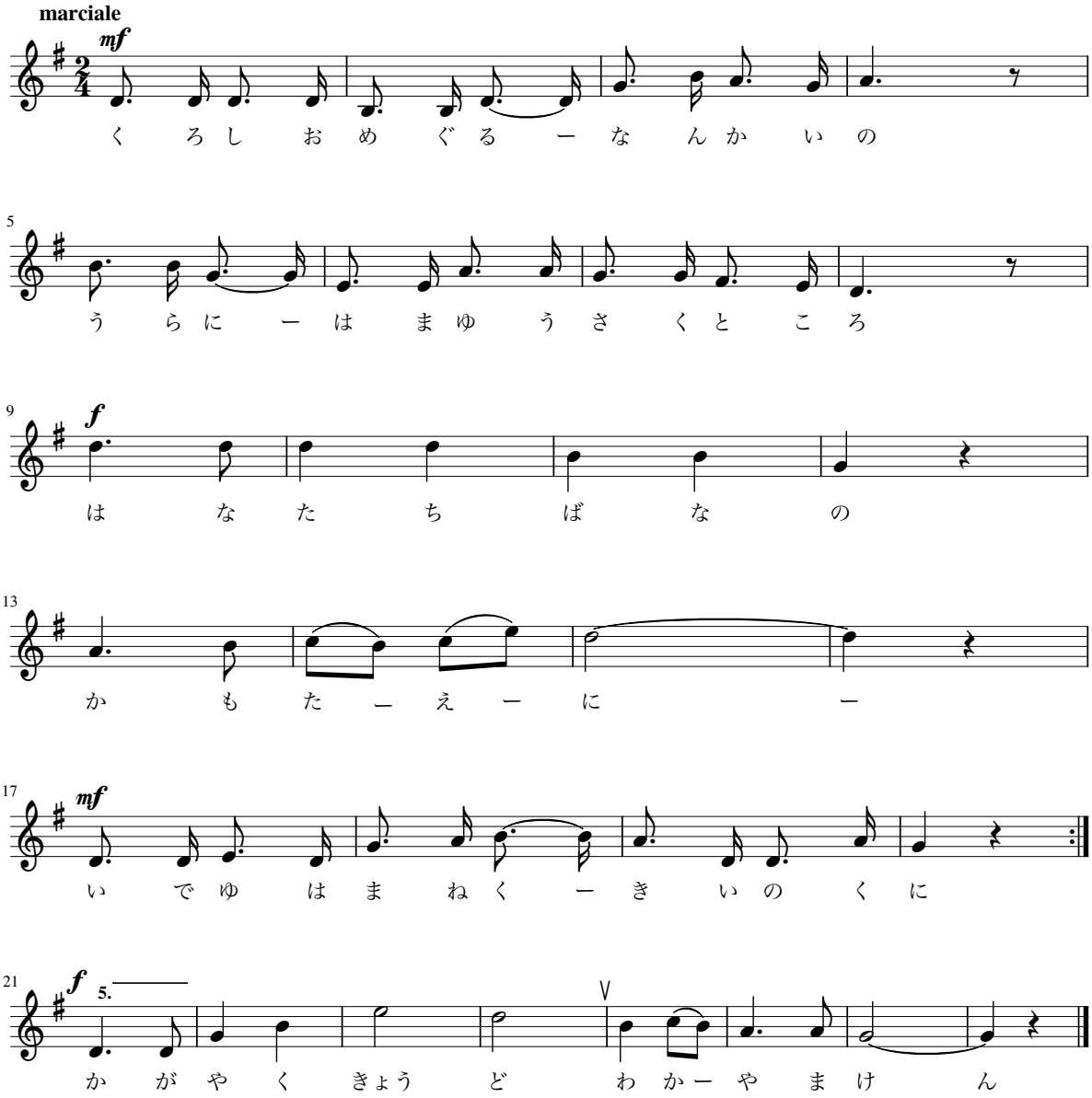
歌詞は 1 番から 5 番まであり、和歌山県の自然・歴史や当時の産業を紹介し讃えるもので、曲はト長調・ 4 分の 2 拍子で、明朗潑剌とした行進曲風になっている。

こうした公募型の県民歌は当時全国的にみても先駆的なもので、県は学校や一般県民への普及を企画した。とくに学校で歌うために、県学務課は文部省に認可を求め、同年 9 月11日付で学校教材として検定認可されたので（『熊野毎日新聞』昭和14年 9 月15日付・『和歌山新報』同年 9 月13日付)、県内の学校などでよく歌われたようであり、高齢の県民の中には記憶されている方も多いようである。

（情報提供：鈴木徹氏、協力：和歌山県立図書館）

和歌山県 県勢歌

山名貫児・三溝信雄 作詞
鈴木富三 作曲



一、黒潮めぐる南海の　浦に浜木綿咲くところ
花橘の香も妙に　温泉は招く紀伊の国

二、大宮人の昔より　書にも著き歌枕
和歌の浦辺や那智の滝　高野に仏法の灯も浄し

三、面積五千方粁の　この故郷の空遠く
波路遥かに打越えて　ゆく人々に栄光あり

四、紀州みかんは日本一　ネル・けし・漆器・梅・鯨
松・杉・檜さまざまの　生産すべて三億円

五、三市七郡百万の　心一つに天地の
栄ゆる御代にいそしまん　八咫の烏のいさおしに
輝く郷土和歌山県